

# 明治期多摩における被差別民の運動と教育 ——山上卓樹（1855-1931）を中心に——

2014/12/13

教育の境界研究会 12 月例会発表（於・茨木市福祉文化会館）

岡本 洋之（兵庫大学）

PHS: 070-5650-0249

Email: okamotoh@hyogo-dai.ac.jp

## ◆要約◆

現在の八王子市域は、江戸の防衛を任務の一つとする八王子千人同心と、武具製造者としてそれを支える被差別民が住んでいたことから、おそくとも天保期には海外との接触に関する情報に敏感にならざるを得ない土地柄だったのではないかと考えられる。

その地で明治前期に「天主堂学校」を建てて被差別民の教育を行い、自由民権運動をも担った山上卓樹は、自身も裕福な被差別民の出身であった。

一方、卓樹が出た被差別部落に近い部落外地域の旧名主の家から、多摩で最初の女学校と幼稚園を創った横川榎子（うめこ）が出た。卓樹と榎子は、ともに中村正直に師事した人である。

市制町村制の施行に伴って、卓樹の部落は新しい「元八王子村」の北部、榎子の出身地は南部となったが、同村内には南北間対立があり、それが 20 世紀初めの尋常小学校統合問題をめぐって燃え上がった。そこで両名がこの問題の解決に向けて接触した形跡はないかと調べてみたが、今のところまだその確証は得られていない。問題解決に向けて動いた中心の一人が卓樹のもっとも近い同志であることを知り、榎子も解決に奔走したという先行研究をキャッチしたに留まっている。

しかしこの追究において当時の『多摩新聞』を見たところ、当時の多摩地域における被差別民の勢力はたいへん大きかったのではないかと印象を得た。

現段階での調べはここまでであるが、岡本はそこで得た内容のうち、多摩における(1)被差別民の勢力の大きさ、(2)自由民権運動の盛り上がり、の 2 点に注目する。もしこの 2 点が、程度の差はあれ関東ないし東日本に広くいえることならば、この方面の部落解放運動は経済力と政治力をもつ地域の有力者が牽引するかたちで、いわば 19 世紀版「反差別共同闘争」から始められたのではないか。そして西日本中心の水平運動の流れをくむ同和教育のなかで、ほとんど言及されてこなかったことなのではないか。

## 本研究の目的

本研究は、現在の八王子市域で明治期に地域の教育史に足跡を残した山上卓樹に着目し、彼を中心とする被差別民および周辺地域住民の姿を描くことから始めて、ともすると関西ないし西日本を中心として語られがちだった部落解放運動と、同和教育において語られる部落史を問い直すことを試みるものである。

### 1. 海外との接触に関する情報が入りやすかったと思われる現・八王子市域

近世、江戸から甲州街道に沿って西に位置した八王子周辺の村落には、平時は農業に従事し、いったん事が起これば武器をとって戦うほか、日光や江戸の火消しも務めた特殊な下級武士集団である八王子千人同心が住んでいた。

1837（天保8）年、日本人漂流民7名の送還とともに通商を求めて浦賀と薩摩に接近した米国船モリソン号(the Morrison)が、異国船打払令のために砲撃され、日本への寄港を断念した（モリソン号事件）。翌年オランダ風説書によって、英国船がこれらの漂流民を日本に届ける予定であるという、誤りを含んだ情報が、はるかに遅れて事件終了後に幕府にもたらされると、幕府上層部では今後異国船が来航した際の対策が検討された。その情報の一部が蘭学者に漏れ伝わった結果、高野長英や渡辺崋山らは異国船への打払いを批判し、幕府からの弾圧を招くことになる（蛮社の獄）。

長英や崋山らと親しく交わった者のなかには、八王子千人同心の一員である松本斗機蔵(1793-1841)がいた。彼は「上書」を著し、その中で英国が海外侵略を推し進め、英国船が日本周辺でも海賊行為を働いていることは認めながらも、漂流民を送還してくれるのならばそれは「殊勝」なことだとしたうえで、この船には「礼讓」をもって接し、漂流民からは外国情報を聞き出すべきだと述べている。そうしなければ「当時強大のイギリスの義に御座候へば万一怨憤を懐き候節に至候はゞ中々以是迄の海賊船の所業にては相済申間敷、終には両国の戦争共相成可申も難測」という。

しかも長英や崋山がモリソンを人名と考えていたのに対し、斗機蔵は「モリソンと申船」（以上、松本、1961年、62頁）と、明確に船名ととらえている<sup>1</sup>ところを見ると、斗機蔵には長英よりも相対的に確度の高い情報源があったと考えられる。

彼が江戸の防衛を任務とする八王子千人同心の一員であったことを考えると、戦争に至る可能性がある対外接触関係の情報が、幕府上層部からひそかに千人同心にもたらされたとしても不思議はない。また、皮革製造に従事していた八王子周辺地域の被差別民は、武具を製造して千人同心を支えたのであるから、戦争の可能性が生じれば必ず彼らにも情報をもたらされたと思われる。

以上より八王子周辺は、おそくとも天保期には、対外情報に敏感にならざるを得ない地域であったと考えられる。

## 2. 山上卓樹——「天主堂学校」を創設した被差別部落の有力者——

山上卓樹はもとの名を作太郎といい、1855（安政2）年に武蔵国多摩郡下壱分方村福岡の裕福な被差別民の家に生まれた。1873（明治6）年には東京に遊学し、中村正直（1832-91）の同人社に学び、ここで人間としての尊厳に目覚めたとされる。

1876（明治9）年ころ、作太郎は親類の青年に誘われて横浜でカトリックに触れ、仏人神父テストヴィド（Germain-Léger Testevuide, 1849-91）より受洗する。その後ただちに彼の指導のもと郷里の被差別部落で伝道し、1878（明治11）年、部落内に聖瑪利亜教会を設立する<sup>2</sup>。当時こ

<sup>1</sup> この点は、大野延胤（2000年、58頁）より教示を受けた。また同頁で大野は、斗機蔵が長英や崋山と同趣旨のことを論じながら、蛮社の獄で弾圧を受けなかったのは、斗機蔵の文章が「上書」の正式な形式に依っていたからだとしている。なお斗機蔵が、長英ら尚齒会のメンバーであったことについては、大野（1998年）が詳しい。

<sup>2</sup> このころの官憲の弾圧に対して作太郎が、「葵の紋が天下を靡かせて居た封建の時代とは違い、文明開化の今日庶民にも自由に宗教を選ぶ権利がある筈だ。何んの宗教を信じようとも社会の安寧と秩序を、乱さない限り、官庁の干渉を受ける理由はない」と論陣を張ったという伝聞情報が

の地方を管轄していた神奈川県が、学校から被差別民を排除することを禁ずる県達<sup>3</sup>を出していたにもかかわらず、福岡の子どもたちは学校から入学を拒否されていたため、作太郎は教会で部落の子どもや大人に読み書き算盤を教えたので、ここは「天主堂学校」と呼ばれた。

まもなく 1880 (明治 13) 年、全国的に国会開設を求める運動が高まると、武相では同年 6 月に相模 9 郡の人民がこの趣旨の建白書を元老院に提出し、その 5 か月後に全国の国会期成同盟員 13 万人から選ばれた代表が東京に集まって国会期成同盟第 2 回大会が開かれる。多摩で国会開設建白運動が始まったのは、相模よりやや遅れて同年暮れからであったが、翌 1881 (明治 14) 年になると石坂昌孝らの努力により、多摩での組織活動は急ピッチで進む。その結果、武相各地に小規模の政社が林立するようになる。それらは同年 10 月に自由党が結成されても、ただちにそこに合流はしなかったが、石坂らの努力でやがてそれらが統一されていき、翌 1882 (明治 15) 年 7 月以降に、石坂が同志を大挙引き連れて自由党に加わるようになると、やがて強大な神奈川自由党として、存在感を発揮するようになる。

この自由民権運動のリーダーたちは主として豪農層であり、学習欲にもあふれていた。色川大吉は、「そこにはギゾー、バツクルの文明史があり、ボーエンの近世哲学、ベンサム功利論があり、アダム・スミスの富国論、スペンサーの社会学原理、哲学原理、道徳原理などと共に、ルソーの民約論の訳を毎号掲載した中江兆民の政理叢談があつたのである。購読していた雑誌も六合雑誌、東京経済雑誌など当時の進歩的な雑誌七誌に及んでいる」と述べてその知的活気を表現し、「北村透谷が、この地に青春をかけ、「希望 (ホープ) の故郷」とよんだのも至当であった」とする。多摩の各地には自由党のいくつもの活動拠点・政治学校があり、その中には自由党浪人の巢窟ともいふべき小学校もあった。

こうして多摩は、自由党の党員数、比率の両方において、全国有数の勢力をもつようになり、党総理の板垣退助から「自由のとりで」、「自由党の東北鎮台」と呼ばれるようになった (以上、色川大吉、1961 年 1 月、5-10 頁)。

このような自由民権運動の高まりのなかで、作太郎は 1882 (明治 15) 年に自由党に入り、1884 (明治 17) 年には民権結社鴻武館を設立する。このころ彼をはじめとする多数の被差別部落民が民権運動に参加したことから沼健吉は、福岡の動きを部落解放運動の先駆だとしている<sup>4</sup>。

民権運動の一環として作太郎は密かに爆裂弾作製を試み、実験中に負傷する。その後 1885 (明治 18) 年の大阪事件で同志がのきなみ逮捕されると、以後彼は暴力的運動から距離を置くようになる (岡村保雄、1973 年、69-70 頁)。そして民権運動自体も敗退していく。

1888 (明治 21) 年、市制町村制施行によって下壺分方村を含む地域は新しく元八王子村となり、作太郎は助役として福岡部落を含む村域全体での有力者でありつづける。

---

ある (岡村保雄、1973 年、68 頁、傍点は岡本)。もしこれが事実ならば、「擬泰西人上書」の内容を天皇に受洗を勧めるものからキリスト教解禁を求めるものに変えて、信教の自由を求めた中村の考えと一致する。とくに「何んの宗教を信じようとも」の部分はこの教育勅語中村草案を彷彿とさせる。

さらに同書同頁には、「村民達が、内心では、昔キリシタンに加えられた迫害が又起るのではないかと、脅え切って居た処、兩人 [作太郎と山口重兵衛 (本文中で後述)] の無事な姿を見て一同安心して、天主に感謝の念を捧げた」ともある。これは福岡部落が隠れキリシタンの地であったことを示唆しているように読める。

<sup>3</sup> 1877 (明治 10) 年 7 月 10 日付。この点については町田市立自由民権資料館編 (2006 年、13-14 頁) から教示を受けた。

<sup>4</sup> 沼は卓樹研究の第一人者であり、1960 年代から雑誌『多摩文化』等に多数の論文を発表してきた。最新の研究は沼謙吉 (2013 年) に収められている。

しかし 1892 (明治 25) 年、福岡部落に大火が発生し、教会も焼失する。これ以後部落外に人口が流出する。また同年、テストヴィドの後任として着任した神父メイランは、信仰上の問題について作太郎らを批判し、天主堂学校財政への支援も中止したので、学校は閉鎖に追い込まれた。その背後には、明治政府の政策がキリスト教への敵視から接近に変わったことを受けて、カトリック教会が布教対象の重点を、被差別民を含む庶民から士族に、また布教方法の重点を辻説法からミッション・スクールでの教育に変更したことがあるとされる (太田勝, 2003 年 8 月) <sup>5</sup>。

1893 (明治 26) 年に作太郎は卓樹と改名し、その後は部落産業の指導者として地域に君臨する。しかしやがて経済力を失って<sup>6</sup>1907 (明治 40) 年に福岡を去り、1931 (昭和 6) 年に死去する。この間、1922 (大正 11) 年には全国水平社が創立されたが、彼はこれに関しとくに発言していないようである (石居人也, 2006 年より岡本推論)。

### 3. 横川様子——多摩における幼児教育・女子教育の創始者——

1853 (嘉永 6) 年に武蔵国多摩郡横川村に生まれた横川様子は、1878 (明治 11) 年に東京女子師範学校に第一回保母練習生として入学し、同年暮に同校摂理・中村正直から証 (今の卒業証書) を授与された、日本最初の養成機関出身保母のひとりである。

卒業と同時に母校に採用され、幼稚園に勤務するが、1884 (明治 17) 年に父が死亡したため、退職して帰郷し、家を継いだ。翌年には自宅内に女子教育授業所を設け、1888 (明治 21) 年にはこれを横山宿 (現・八王子市横山町) に移し、それを母体として 1892 (明治 25) 年には八王子町上野 (現・八王子市天神町) に、私立八王子女学校および私立八王子幼稚園を、多摩地区で初めての女学校および幼稚園として開いた。

校園の経営はたびたび危機に直面したが、様子はどうかこうにか乗り切った。やがて 1906 (明治 39) 年に東京府立第四高等女学校建設の議が起こると、かねてから完全な高等女学校の必要性を説いていた様子は、女学校の校地・校具いっさいの寄付を申し出、それを受けた八王子町議会等の運動により、府立第四高女 (現・東京都立南多摩高等学校) が八王子に設置された (以上、岸田林太郎, 1984 年 11 月; 光石知恵子, 1993 年; 江刺昭子, 2008 年 8 月)。

### 4. 元八王子村尋常小学校統合問題

卓樹と様子に接触があった証拠を、岡本はまだ見出せていない。しかし両名は同じ中村正直門下であり、教育に情熱を傾ける点で共通しており、そのうえ 1888 (明治 21) 年の元八王子村成立後は、卓樹が住んだ所が新村の北部、様子の実家のある所が新村の南部となったため、両名の間に何らかの接触があっても不思議ではないと思われる。

ところでこの元八王子村は、成立当初から南北間に対立があった。沼によると、南部の中心地・慈根寺 (じごじ) には八王子千人同心の流れをくむ住民が多く、保守色が強かったのに対し、北部の中心地・下壺分方は部落産業を含む近代工場を有するがゆえに経済力をもち、カトリックの導入や自由民権運動への積極的参加も見られるなど、近代思想の洗礼を受け、進取の気性に富ん

<sup>5</sup> ただし作太郎とメイラン個人は友好関係を終生保ったようである。

<sup>6</sup> 卓樹と弟の貞三はそれぞれ皮革工場を経営していたが、日露戦後の不況期にも労働者をほとんど解雇せず、逆に賃金を上げており (八王子市市史編集委員会編, 2012 年, 276-278 頁), 卓樹の場合はこれが没落の一因となったようである。

でいた。両集落はそれぞれ近接集落を傘下に入れて対立し、それが小学校統合問題をめぐって燃え上がった。

すなわち、元八王子村には北部と南部に1校ずつの尋常小学校があったが、いずれも手狭になっていた。対策をとろうにも、村の財政事情により2校それぞれに新築校舎を建てることはできないため、統合して新校舎を建てるのが当然と思われたが、ここで新設校の位置をめぐって南北対立が激化した。

この問題は、おおよそ1903（明治36）～1910（明治43）年の約7年間にわたって続いたが、沼はこの間に解決に向け尽力した人のなかに、南部の横川楳子と北部の山口重兵衛(1848-1926)を挙げる（以上、沼謙吉、1960年7月）。山口は若いころ卓樹と同時に受洗し、1890（明治23）年の神奈川県会議員選挙では彼の支援を受けて当選していることから、卓樹ともっとも近い同志といえる。中村正直門下とその関係者の人脈が、八王子の地における紛議解決に実をあげたという見方が、あるいはできるかもしれないが、今のところはこれ以上はわからない。

## 5. 多摩における被差別民の存在感の大きさ

### ——小学校統合問題をめぐる『多摩新聞』の報道から考える——

この統合問題では、1909（明治42）年12月に村会が統合案を可決したのに対し、北部では住民の多くが統合に反対し、翌1910（明治43）年1月31日には反対決議が挙がり、同盟休校が起こった（沼謙吉、1960年7月、93頁）。そして南多摩郡会議員であった山口がこれを賛成の立場から説得するという構図になった。当時尋常小学生であった岡村保雄は次のように回顧する。

村会の決定を知った上一分方、下一分方の村民は自分達の財産を取り上げられ、自分達の子弟は遠い学校に通学させる〔させられる〕等、色々の意味で反対論が盛り上がって来た。其の上反山口武藤派の村会議員が猛烈なアジティションを掛けたので、事態は急激に悪化して大騒動に発展した。私の生家の二階の十二畳の室は毎日毎晩学校統一反対の為の集会が行はれて〔行われて〕、悲憤慷慨の声を〔声は〕五年生十一才の私の耳に焼き付けられた。

山口重兵衛さんと云えば村民の崇敬的であったが、武藤村長と共に小学校統一の指導者であったことが、統一反対の人達の知る処となり、山口の家に石を投げ込み、又武藤村長の家には雨戸〔を〕破り飛び込む、役場で暴力を振るう等で役場の職員も、武藤さんの家族も恐れて避難すると云うような始末だったが、山口さんの家は重兵衛さんを除けば皆女ばかりの世帯であったにも拘らず、誰一人避難する者もなく成り行きを見守って居られた。

此の有様に警察も動き出し、若い人達が毎日検束されて行く姿は私の目に今でも残って居る。（岡村、1973年、65-66頁）

反対派と山口の対立には、多分に被差別民どうしの対立という要素がある。

一方、奇妙なことに『多摩新聞』はこの騒ぎをまったく報道していない。同紙は現在『明治末期 週刊多摩新聞全集』として縮刷版が刊行され、第1号（1909〈明治42〉年3月10日）～第36号（1910〈明治43〉年3月11日）を読むことができるが、官吏や教員の醜聞は生々しく報ぜられているのに対し、上の事件にはまったく触れられていない。強いていえば、横川楳子について、次のように書かれているだけである。

[前略] 八王子女学校は今や廃されて、師範学校の講習所と成て居るのである、ア、此の女学校の建設者は女天狗として名声を近郷に轟ろかした横川梅子〔榎子〕女史である、然り梅子女史は天狗か人か自分は知らないが、八王子女子教育の開拓者である、今や功成て横川村水無瀬橋畔によもや菅公を真似たと云ふ訳では有まいけれど庭内梅樹を植へ門を堅く鎖して、安らかに老後を送りつゝありと、梅子女史夫れ安じて可なりだ、女史の生涯は梅花の如く馥郁と香つて居るのである、(「瞑想録 女天狗」, 1909〈明治42〉年9月30日, 4面)

ここで、ふつうは記事として取り上げられない「門を堅く鎖して、安らかに老後を送りつゝあり」の榎子の様子が記事になっていることは、奇妙ともれよう。

他方、『多摩新聞』を読んでいると、屠場の開場式がたいへん丁寧に報じられていることに気づく。出席した官吏の地位と名前、式辞等のプログラム、式後の懇親会のことまでが詳しく書かれている(「北多摩屠畜場開場式」, 1909〈明治42〉年9月20日, 4面; 「八王子屠畜場創立」, 同年7月12日, 3面; 「保谷屠殺場開場式」, 同年12月10日, 4面)。

『多摩新聞』が、屠畜業に従事する被差別の人々に好意的な眼差しをもっているのだとすると、上述の、尋常小学校統合をめぐる被差別民の仲間割れともいべき事件は、あえて記事にしなかったのではないか。どちらかに肩入れした記事を書きしまうと、新聞社が紛議に介入する形となり、火に油を注ぐと判断された可能性もある。

そのかわりに同紙は、旧名主の家の出である榎子を取り上げた記事を書いて、深まりつつあった元八王子村の南北間問題を「何とかしたらどうか。家に引っこんでいる場合ではないのではないか」というメッセージを送ったのではないかと考えられる。

ここまでマスコミが慎重になっているのだとすれば、1907(明治40)年に卓樹が故郷を去ったのちも、この明治末期の八王子ないし多摩地域における被差別の人々の存在感(勢力)はひじょうに大きかったといえるのではないか。それがこののち水平社創立から戦後にかけてしだいに小さくなるのではないかと思われる。

## 6. その他、八王子と間接的に繋がる中村門下生

安藤劉太郎(関信三)……最初の日本人プロテスタント牧師の一人である小川義綏(八王子千人同心の流れをくむ)と横浜で「布教」活動。

### 結論および今後の課題

前述の「要約」を参照。

今後の研究の方向は、こののちの水平運動に関することになることも考えられる。

1922(大正11)年 全国水平社結成。

1924(大正13)年 遠島スパイ事件, 中央執行委員・平野小剣(1891-1940)の除名。

- ・朝治武(2013年, 166頁)は平野を「保守的」と評する。
- ・平野はまた、米国の排日移民法反対運動に極めて熱心であった(同書, 174-178頁)。
- ・全国水平社を除名されるとき平野の発言「関東と関西では同じ水平社でも非常に境遇が異つてゐて関東側は関西側に比べて文化程度も進んでゐる上に相当の財産家が多く、ムキになつて勢

力争ひなどをやるやうな手合はない筈だ」(同書, 202-203 頁)

→以上の点は、関西ないし西日本からはわかりにくい点ではないか。

## 引用・参考文献

朝治武 (2013 年)『差別と反逆——平野小剣の生涯——』, 筑摩書房。

石居人也 (2006 年)「山上卓樹の覚書『漫草録』」, 町田市立自由民権資料館編『山上卓樹・カクと武相のキリスト教——響きあう信仰と運動——』, 同館, 96-99 頁。

色川大吉 (1961 年 1 月)「三多摩自由民権運動史——序章 豪農自由党王国の成立——」, 『多摩文化』第 7 号, 多摩文化研究会, 2-10 頁。

江刺昭子 (2008 年 8 月)「自由民権期の女子教育と家族——石阪美那・横川樗子・吉野りうの場合——」, 『多摩のあゆみ』第 131 号, たましん地域文化財団, 38-49 頁。

太田勝 (2003 年 8 月)『『明治』初期の元八王子村——山上卓樹を中心にして——(2)』, 『解放新聞』第 2131 号, 解放新聞社, 10-11 面。

大野延胤 (1998 年)「尚齒会についての一考察」, 『学習院女子短期大学紀要』第 37 号, 同短期大学, 119-125 頁。

—— (2000 年)「松本斗機蔵とその著述・序説」, 『学習院女子大学紀要』第 2 号, 同大学, 51-67 頁。

岡村保雄 (1973 年)『七十五年——わが道草——』, [八王子] ふだん記全国グループ。

岸田林太郎 (1984 年 11 月)「八王子郷土史上の女性——松原庵星布と横川樗子——」, 『多摩のあゆみ』第 37 号, 多摩中央信用金庫, 43-48 頁。

「北多摩屠獣場開場式」(1909 年 9 月 20 日), 『多摩新聞』第 20 号, 多摩新聞社, 4 面。

沼謙吉 (1960 年 7 月)「元八王子尋常高等小学校発足の意義——学校統合の経過——」, 『多摩文化』第 5 号, 多摩文化研究会, 91-94 頁。

—— (2013 年)『武相近代史論集——八王子・津久井を中心に——』, 揺籃社。

八王子市市史編集委員会編 (2012 年)『新八王子市史 資料編 5 近現代 1』, 八王子市。

「八王子屠獣場創立」(1909 年 7 月 12 日)『週刊多摩新聞』第 13 号, 多摩新聞社, 3 面。

「保谷屠殺場開場式」(1909 年 12 月 10 日), 『多摩新聞』第 28 号, 多摩新聞社, 4 面。

町田市立自由民権資料館編 (2006 年)『山上卓樹・カクと武相のキリスト教——響きあう信仰と運動——』, 同館発行。

松本斗機蔵 (1961 年)「松本斗機蔵の漂民送還に就ての上書」, 『多摩文化』第 7 号, 多摩文化研究会, 62-64 頁。

光石知恵子 (1993 年)「明治時代の八王子の教育と横川樗子」, 八王子市郷土資料館編『明治時代の八王子』, 明治時代の八王子展実行委員会, 21-40 頁。

『明治末期 週刊多摩新聞全集』(1970 年), 調布史談会復刻。

「瞑想録 女天狗」(1909 年 9 月 30 日), 『多摩新聞』第 21 号, 多摩新聞社, 4 面。